

様式 1

研究報告書（平成 25 年度）

提出者 藤川直也

提出年月日 平成 26 年 3 月 31 日

【本ユニットにおける研究テーマ】

和文 西田幾多郎の絶対無に関する分析アジア哲学的研究：矛盾許容的な素朴集合論の観点から

英文

Nishida' Absolute Nothingness: Form a view point of paraconsistent Naive Set Theory

【研究のねらいと目的】 (600 字程度)

近年、アジア圏の哲学を分析哲学の道具立てを用いて理解する、あるいは分析哲学において論じられている問題にアジア圏の哲学のアイデアを用いて取り組むという研究領域が誕生しつつある。分析アジア哲学と呼ばれるこうした研究動向を踏まえ、本研究は、西田幾多郎の場所の論理と絶対無の概念をとりあげ、とりわけ『働くものから見るものへ』に代表される中期西田の著作に注目しつつ、それを非古典論理の一種である矛盾許容論理の観点から理解することを試みる。とりわけ絶対無の主要な特徴（すべてのものがそこにある場所、あるいはすべてのものを包む場所であるという包括性、自分自身がそこにある場所、自分自身を映す鏡であるという反射性）に対して、矛盾許容論理上の素朴集合論の観点から、その整合性に対する一定の説明を与えることを目標とする。同時に、西田幾多郎の絶対無の概念とマルティン・ハイデガーの存在および無の概念とを比較し、両者の共通項を探ることで、ハイデガーの哲学と京都哲学の間の影響関係についての再考を試みる。

【研究業績】 学会報告・論文など

学会発表（下線が発表者）

Casati, F. and Fujikawa, F. (2014). 'Heidegger's Nothingness and Nishida's Absolute Nothingness' *The 6th Next Generation Global Workshop*, Kyoto University. Jan 12, 2014.

Fujikawa, N. and Casati, F. (2014). 'Nothingness and Its Form: Form a View Point of Paraconsistent Mereology', *2014 NCCU-KU-YaleNUS Workshop in Asian Philosophy*, National Chengchi University, March 7, 2014.

【成果の概要】（800字程度）

本年度は、セントアンドリュース大学の Filippo Casati 氏との共同研究を通じて、次の二点に関して成果をあげた。

(i) 西田幾多郎の絶対無とハイデガーの無の比較

本研究では西田の絶対無とハイデガーの無を比較し、以下の点を論じた。第一に、ハイデガーと西田はともに、対象ないしあるもの (beings) であるとは、私たちの志向的状态、意識がそれについてのものでありうるということだと考えており、さらに彼らは無／絶対無をすべての対象がそこに基礎づけられるような基礎的な存在者であるとしていた。第二に、こうした特徴づけからは、無／絶対無が、対象であると同時に対象ではないという矛盾する性質を本質的にもつということが帰結する。

本研究の成果は、the 6th next generation global workshop (Kyoto University, January 12, 2014)において発表した。

(ii) 矛盾許容論理上のメレオロジーを用いた絶対無と相対無の研究

当初の研究計画では、西田幾多郎の絶対無を矛盾許容論理上の素朴集合論を用いて分析することを目標としていたが、研究の進展により、ここでは、矛盾許容論理上のメレオロジーを用いた。よく知られているように西田は、無を、有るものの否定としての相対無と、有と無の対立を超越し、それを成立させるようなものとしての絶対無を区別した。本研究では、すべての対象のメレオロジー的な和の complement、そして、対象とその complement の積(product)（これは本質的に矛盾した対象である）をもつ矛盾許容論理上のメレオロジーの体系を考えることで、相対無の対応物として、すべての対象の和の complement が、そして絶対無の対応物として、すべての対象の和とその complement の積が挙げられうると論じた。

本研究の成果は、2014 NCCU-KU-YaleNUS Workshop in Asian Philosophy (National Chengchi University, March 7, 2014)において発表した。

【通信欄】